近代イランにおける宗教と政治

——タバコ・ボイコット運動(1891—92年)とウラマー——

Religion and Politics in Modern Iran

——Tobacco Protest 1891-92 and The Role of the 'Ulamā'——

佐藤規子^{*}
SATO Noriko

ABSTRACT The purpose of this paper is to examine the actual role of the Shi'ī 'Ulamā' in the Tobacco protest of 1891-92 in Iran. The protest was an unprecedented mass movement against the concession of tobacco monopoly granted by the Iranian government of Qājār dynasty to an English company, and the 'Ulamā' of the Twelver Shi'ī Islam played the leading role of the movement.

This paper depends mostly on many kinds of Persian historical materials concerning the Tobacco protest such as telegrams and letters exchanged between the 'Ulamā' in Iran and the Shi'ī holy city of Iraq, and so on. These materials were collected in the book entitled "Tārikh-e Bidāri-e Īrāniān (History of the Awakening of the Iranians)" written by Nāẓem al-Eslām Kermānī, an Iranian Intellectual, who actually participated in the Protest.

In the previous studies about the role of the 'Ulamā', there has been a tendency to analyze it from the view point of modernism. This paper attempts to clarify it with special consideration on the Religious institution, Marja-e Taqrīd (the source of supreme exemplar) institution in the Twelver shi'ī Islam.

はじめに

タバコ・ボイコット運動は、19世紀末、カージャール朝政府が、タバコの生産、国内販売、輸出などの包括的権利を、イギリス人に譲り渡したことに反対

* 広島大学大学院社会科学研究所後期博士課程
Ph.D. Candidate in the Graduate School of Social Science, Hiroshima University

して起った民衆抵抗運動である。1981年春、タバコ商人を中心にイランの主要都市で始ったこの運動は、最終的にはあらゆる階層のひとつとを巻き込んだ国家的規模の抵抗運動へと発展し、その結果、1892年初頭にタバコ利権は廃止された。

この運動には、十二イマーム派シーア派のウラマーが多数参加し、指導的役割を果たしたことが知られている。ウラマーは、運動のはじまりと同時にイラン各都市においてこれに参加し、民衆の抗議運動を指導した。また、当時イラク領内シーア派聖地都市に居住していたシーラジー師もこうしたイラン国内の運動を支持し、喫煙を禁じる教令を発令してタバコ利権に反対した。この教令は広範なひとつの支持を集め、この後、約二ヵ月間にもわたって「タバコ・ボイコット」による全国的な抵抗運動が繰り広げられたのであった。

イラン近・現代史では民衆抵抗運動、体制変革運動においてウラマーが参加し、政治的問題に積極的に関わる姿勢を取ってきたが⁽¹⁾、本稿は、そうした歴史の起点と位置づけられているタバコ・ボイコット運動へのイランのウラマーの参加の具体的様相を考察し、その指導的役割の実態を明らかにしようとするものである。

ところで、タバコ・ボイコット運動は、イラン近代史研究上民族主義運動の起点と位置づけられ、これにかんする研究も数多く出されている⁽²⁾。そのうちとくに、ウラマーの参加の問題に考察の主眼を据えた研究も、アメリカの著名なイラン近・現代史研究者であるN. R. ケディエによってすでにおこなわれている。ケディエの研究は、タバコ・ボイコット運動の全体像の解明を図りつつ同運動におけるウラマーの役割を考察しようとしたものである。その際、この運動に多大な思想的影響を与えたとされているイスラム改革思想家ジャマロッディーン・アフガーニーとイランのウラマーとの結びつきに注目し、ウラマーの役割をモダニズムの観点から論じている。主要一次文献としてイギリス、及びフランスの膨大な外交官文書を用いており、これらの資料を駆使することによってウラマーの参加の全体的様相を実証的に明らかにしたといえる。

しかし、その一方で、同氏の研究では、イラン側の資料はあまり重視されていない。たとえば、タバコ・ボイコット運動にかんするペルシャ語文献の一つに、この運動に直接参加したイラン人ナーゼモル・エスラーム・ケルマーニーによって著された『イラン人覚醒の歴史 (Tārikh-e Bidāri-ye Īrāniān)』

所収の同運動にかんする諸資料がある。⁽⁴⁾それらの中には、運動の期間中にウラマー同士、あるいはウラマーと国王などのあいだで交わされた様々な書簡や電報文などが数多く含まれていることから、この運動へのウラマーの参加の実態をより一層明らかにするうえできわめて有用かつ資料価値の高いペルシャ語文献であるといえる。しかしながら、こうした資料は必ずしも十分に活用されてきてはいない。

したがって、本稿では、それら諸資料の内容を明らかにする作業を通して本題の検討を試みることにする。その際、モダニズムの観点からではなく、近年、イランのウラマーの政治参加の教義的背景として注目されつつある、十二イーム派シーア派の宗教制度の存在に注目する観点からの考察をおこないたい。

なお、上述のケルマーニーの諸資料はきわめて限定的なものであり、こうした資料だけで運動の経緯を追っていくことは不可能であることから、本稿では当時のイギリスの在イラン外交官と本国とのあいだで交わされたタバコ利権に関する通信書簡集、*Correspondence Respecting The Persian Tobacco Con-*⁽⁶⁾*cession* を付随的に使用することとする。

I. タバコ利権反対運動の勃発とその広がり

タバコ・ボイコット運動勃発の原因となったタバコ利権の譲渡契約は、運動のはじまりの約一年前、1890年3月8日、ヨーロッパ旅行中のナーセロッ・ディーン・シャーとイギリス人投資家タルボットとのあいだで交わされた。これにより、むこう50年間における水タバコ用きざみ (tanbākū)・キセルタバコ (tūtūn) (以下「タバコ」とす) の原料の買い付け、輸送、加工、国内販売、さらには輸出までも含むイランのタバコにかんするあらゆる独占権が外国人の手に渡り、その見返りとしてイラン政府は、年額1万5千ポンド、および、その純利益の4分の1の額を受け取ることが決定された。⁽⁷⁾

このような利権譲渡の背景には、当時のイランの抱える深刻な経済状況があった。この頃イランでは、ヨーロッパ諸国の経済的侵略によるイラン経済の衰退や、幾度か試みられた政府による近代化政策の失敗により、国庫の窮乏は避けられない問題となっていたが、政府はこれを、イランにおける鉄道敷設、鉱山採掘、銀行設立などの権利を「利権」というかたちで西欧列強に売り渡すことによって回避しようとした。タバコ利権の譲渡もこうした政策の一環として⁽⁸⁾

おこなわれたが、当時イランのタバコ産業は主要な土着産業のひとつに成長しており、また、喫煙も広く一般大衆のあいだに普及していたことから、タバコ利権は鉄道や鉱山などの他の利権とは異なり、イラン人の生活を直接脅かす危険性をもっていた。⁽⁹⁾しかし、この利権交渉は当初から秘密裏におこなわれたため、当のイラン人自身は、在外同朋の警告やイスラム改革思想家ジャマール・アッディーン・アフガーニーのはたらきかけなどによって初めてこの利権の存在やその危険性を知ったのであった。⁽¹⁰⁾

利権に反対する抗議行動が、タバコ商人を中心に民衆レベルにおいて始まったのは、タバコ会社（レジー）の業務がイランで開始された1891年4月頃である。まず、最初の大規模な抗議運動は、最大のタバコ産地ファールス地方の中心都市シーラーズで起った。同市の有力ウラマー、セイエド・アリー・アクバル師がタバコ会社を強く非難する説教をはじめると、これに苛立った国王は知事に命じて彼をイラクの聖地へ追放させるという強行措置を講じたが、このことはかえって住民の反利権感情を煽る結果となった。⁽¹¹⁾

5月にはいと抗議運動はシーラーズにつづいてタブリーズにも飛火した。タブリーズ住民は同市でのタバコ会社支店の開設に激しい抵抗を示し、8月には遂にタバコ会社代理人を同市から追放した。これに触発され、エスファハーンやマシュハドでもウラマーに指導された本格的な抗議行動が始まり、1891年秋頃までにはイランの主要都市で強力な抵抗運動が繰り広げられるようになった。⁽¹²⁾

こうしたなか、イラクにあるシーア派聖地都市のひとつ、サーマッラーに居住していたシーラーギー師も国外からこの運動への支持を表明した。シーラーギー師は、当時十二イマーム派シーア派にあってマルジャ・エ・タクリード（模倣の源泉）とよばれる地位にあったウラマーである。

マルジャ・エ・タクリードとは、十二イマーム派シーア派にあって最も学識あるとみなされた宗教的権威を意味することばである。同派においては、17世紀以降、オスーリー（原理、法源）、アフバリー（伝承）両学派によって、イジュティハードとよばれるウラマーの法判断権をめぐる激しい教義論争が展開されたが、18世紀にオスーリー派が勝利した結果、ウラマーのなかでもイジュティハードを有する階層であるモジュタハドの権限を著しく増大させる教義が形成されるに至った。⁽¹³⁾そして19世紀半ば頃までには、その理論の延長として、

モジュタヘドのなかで最も学識ある人物をマルジャ・エ・タクリードとみなし、この人物に信仰生活にかかわるすべてのことがらの最終的な法判断を仰ごうとする宗教的制度が成立した。この結果、全ウラマー、全信徒がマルジャ・エ・タクリードのもとにしたがうという宗教制度（マルジャ・エ・タクリード制度）が理論上確立すると同時に、ウラマーの政治的問題への関与を正当化する論理的基盤が準備されるに至ったのである。⁽¹⁴⁾

シーラージー師は、初代シェイフ・モハンマド・ハサン・ナジャフィー師、二代目シェイフ・モルタザー・アンサリー師を継いでマルジャ・エ・タクリードの地位に就いたが、ナジャフィー、アンサリー両師はイランの政治に直接関与することはなかった。⁽¹⁵⁾したがってシーラージー師は、マルジャ・エ・タクリードとしてイランの政治にかかわった最初のウラマーということになる。

シーラージー師は、アフガーニーをはじめイラン内外の多くのひとびとからこの運動の支持を要請されながら、それまでこうした要請に応える何らの具体的な行動も示さなかった。しかし、運動がイラン諸都市に拡大するに至り、ついにイラン国王ナーセロッ・ディーン・シャーのもとにイランのできごとを憂慮する内容の書簡を電報にて送付した。その文面は以下の通りである。

「慈悲深く慈愛あまねきアッラーの御名において

私めは、従来、ひたすら祈ることで事足りりとし、陛下になんらの請願も致しませんでした。二、三の難問が発生したとの報に接し、その害を奏上致さぬのは、宗教、政府の諸法に反することになるので、（以下のごとく）申し上げます。

国内事業に外国人が関与したり、外国人がムスリムと親交を結んで、銀行、煙草、鉄道などの事業をおこなうことを許すのは、いくつかの理由により、コーランと神の法に明かに矛盾し、国家の自立を損い、国家秩序を脅し、国民一般が困窮するもとであります。アフマド・ビン・ムーサーの聖地で多数のムスリムが殺傷され、その聖廟が冒瀆されたシーラーズ事件、そして、ハッジ・セイエド・アリー・アクバル殿の不条理な追放は、叙上の事柄の一例であります。

もちろん、これらのもたらす害は、陛下のお耳には達していないに相違ありません。さもなくば、イスラムと国家の発展に腐心されている陛下がこれらが起こるのを是認されとは考えられません。国家への忠誠の立場からも、王と王位の隆盛、存続にたいする神の恵みがつづいた後で、その害

が将来、宗教、政府、国民に及ぶ（こと必定な）これらのことが、陛下の治世におこなわれ、政府の幾年にも及ぶ名声に傷のつくのを、私は決して認めることはできません。

もし、当件にかんして政府当局がお許しになっているならば、国民の総意に従って、この腐敗を最良の方法で正すよう、また、この年寄りの代わりに今に至るまで聖域に難を避けておりますアクバル殿にお情をおかけくださるよう、心より希望致します。そうすれば、いやがうえにも全てのウラマー及び国民の（陛下のための）祈りは増すでありましょう。⁽¹⁷⁾」

以上のように、国王にたいする礼節を尽くした文面ながら、シーラージー師はこの書簡のなかで、イランの状況を憂え、タバコ利権だけでなく、銀行設立、鉄道敷設などの他に利権についても言及してこれらをイスラム法に違反するものとして批判し、すべての利権をすみやかに廃止するよう国王に要請している。

国王および宰相アミーノッ・ソルタンは明らかに運動の広がり動揺をみせはじめ、1891年10月6日にはイギリスの駐テヘラン公使ケネディに利権の廃止を打診したが、それには多くの困難がともなうとの理由でイギリス側に即座に拒否された。⁽¹⁸⁾ 国王側はこうした状況に何の具体的な対応も示すことができず、これにたいしてウラマーに率いられた反利権運動はさらにその激しさを増していった。

II. タバコ教令発令と運動の高揚

諸都市における抗議行動は、もはや地方政府の手に負えないほどに高まり、国王は追いつめられつつあった。このようななかで、1891年11月半ば、すべてのタバコ製品を廃棄するというあらたなかたちの抗議動運が始った。駐テヘラン公使ケネディの後任としてイギリスより赴任して間もないラッセルのもとに、エスファハーンの英国領事から寄せられた11月20日付けの報告によれば、それは、同市の有力ウラマーであるモッラー・アーガー・ナジャフィー師と彼の兄弟のシェイフ・モハンマド・アリー師がタバコを「不浄」だと宣言し、加えてかれらに従う者たちによってパーザール中のあらゆるキセルが壊されるという事態に認められた。⁽¹⁹⁾

この「タバコ・ボイコット」による抵抗運動は11月末から12月初めにかけて他の諸都市にも及び、それとともにシーラージー師によりタバコ教令が発令さ

れたとの噂がイラン各地に広まり始めた。それは、イランからサーマッラーのシーラーギー師に宛てられた以下のような電報に認められる。

「ホッジャット・ル・エスラーム（シーラーギー）様

以下のとおりの問答の文面があなた様のものとして広まっております。

もしそのとおりならば、直筆で明確にお書きください。もしそれが正しいとすれば、この利権行為が撤廃された場合、この教令（ホクム）はなおも存在し続けるのでしょうか。それとも効力を失するのでしょうか。

（問）

イスラムの地において、タバコ問題にかんして起っておりますこの状況に照らして、目下のところ、水タバコを吸うことはシャリーア上、いかなるものでありましょくか。ムスリムはどのようにすればよろしいでしょうか。ムスリムの取るべき方法をお示しくださいますようお願い申しあげます。

（答）

慈悲ふかく慈愛あまねき神の御名において

こんにち、刻みタバコおよび葉タバコの使用は、いかなる法においても第12代イマームにたいする戦いである。⁽²⁰⁾」

イラン史上名高いタバコ教令は、ここにみるように、喫煙という行為のイスラム法上の是非を質す問にたいし、マルジャ・エ・タクリードであるシーラーギー師の法判断として示されたものである。それは十二イマーム派シーア派に象徴的なことばで表現されているが、明らかに喫煙を禁じる内容のものであった。

上記のイランからの教令にかんする問い合せにたいし、シーラーギー師は、教令発令の事実を認め、またその効力についてはタバコ利権が解除されるまでとする次のような返答を送り返した。

「慈悲深く、慈愛あまねき神の御名において

事実であります。利権解除があった場合の教令継続の問にたいする答えは、解除されれば、私からみて喫煙しても支障ありません。神が最もよく御存知である。⁽²¹⁾」

しかし、ケルマーニーによれば、タバコ教令の発令はシーラーギー師によって発案されたものではなく、まずテヘランの有力ウラマーの一人、アーシュェティヤーニー師がその文面を起草し、その後その内容と発令にかんしてシーラー

ジー師の合意を得て、アーシュティヤーニー師によって発出されたものであった。以下は、この点にかんするケルマーニーの記録である。

「(前略) 一群の識者がモジュタヘドであった故ハッジ・ミールザー・ハサン・アーシュティヤーニーを訪ね、本件に潜む弊害について話した。

また、エスファハーンのウラマーに利権のもたらす損害およびこの帰結について文書をしたためた。そこで故ミールザー・アーシュティヤーニーは喫煙をシャリーアによって禁じられたことと断じ、下記の文面の教令を起草し、それをホッジャット・ル・エスラームであった故ハッジ・ミールザー・ハサン・シーラーギーのものとして公布した。(教令文省略)

公布に先立って、当時サーマッターにおり、12イマーム派の長であったミールザー・モハマド・ハサン・シーラーギーにたいして文書による説明がなされた。彼も(教令に)署名し、よく自分の態度を堅持した。」⁽²²⁾

イラン国内では、タバコ教令発令の事実が伝えられると、多くのひとびとがこれに従い、喫煙を止めた。しかも、十二イマーム派シーア派内においてシーラーギー師と宗派を異にするひとびとや、また、大使館職員やハレムといった、いわば国王寄りの立場にいるひとびとまでもがこの教令を受入れたのであった。その様子は、ケルマーニーによって次のように記されている。

「教令公布をうけて、イラン全土であらゆる宗派に属する者が歩を一にして水煙管、キセル、紙巻きタバコを吸うのを止めた。ひとびとは自ら水煙管を壊し、大量のタバコの葉を燃やした。

ケルマーンでは、ひとびとがシャイヒー派の長老故ハッジ・モハンマド・ハーンにどうすべきか尋ねたところ、「我々はシャリーア上の副次的問題では(他の宗派の)法学者達と意見を異にするが、政治的問題ではもちろん教令に従いなさい。」と言って、率先して水煙管を吸うのを止めた。⁽²³⁾

テヘランにおいてもいくつかの大使館でイスラム教徒の下級職員がタバコに関係ある職務を拒否し、それを許されもしたと聞いている。

さらにナーセロフ・ディーン・シャーのハレムの女官達は、水煙管をはじめとしてタバコに手を触れなかったとも聞いている。」⁽²⁴⁾

タバコ教令の発令によって、それまでイラン主要諸都市のバーザールを中心に繰広げられてきた抗議運動は、「タバコ・ボイコット」という共通の抗議行動による全国的規模の運動へと発展した。そうしたなかで、それまで他の諸都

市と比較してそれほど深刻な抗議運動が起っていなかった首都テヘランでもアーシュティヤーニー師を中心にタバコ利権の廃止を求める行動が活発化した。⁽²⁵⁾これまでイギリスに説得されて利権の継続を主張して譲らなかった国王、政府も、反対運動の全国的な拡大と首都での運動の盛り上がりを深刻に受け止め、アーシュティヤーニー師をはじめとするテヘランの有力ウラマーと直接交渉をおこなう一方、イギリス側に事態打開のため国内利権の廃止を要求し、それともなう損失は、タバコ税の引上げによってうめあわせるとの提案をした。テヘランでの状況の悪化を恐れたイギリスもついにタバコ会社にたいしてイラン政府の提案を受け入れるよう助言し、会社もこれに譲歩の姿勢を示した。これをうけてアミーノッ・ソルタンは12月18日、ウラマーと会合をもち、国外利権⁽²⁶⁾（輸出利権）の存続には触れずに「タバコ利権は廃止された」と告げ、このことはシーラージー師にも知らされた。

テヘランでは、有力ウラマーの多くがタバコ利権廃止にかんする政府の発表を信用せず、シーラージー師の教令を支持して禁煙行為は続けた。しかし、その一方で、やはりテヘランの有力ウラマーのひとりであるベフバハーニー師は、「まず、わたしはモカッレド（一般信徒）ではなくモジュタヘドである。つぎに、ミールザー・シーラージーのものとされる指令はホクムなのか、それともファトワーなのか、もしホクムならば告発者と被告発者がいて、両者出席のもとに出されなければならないし、もしファトワーならば、イスラム教徒全体にかかわる問題でなければならない。また、ファトワーは、モカッレドにとって⁽²⁷⁾はそれを実行する必要があるが、モジュタヘドにとってはそうではない。」と述べて教令を支持しなかった。また、ナージュマバーディー師も、「わたしは喫煙を無条件にシャリーアで禁じられたものと考え。あるときに良く、あるときに悪いというものではない。⁽²⁸⁾」と述べて、禁煙はするがそれはシーラージー師の教令によるものではないことを表明した。

こうしたウラマーの存在を意識してのものか、この時期、テヘランではシーラージー師の教令の権威を説き、挙ってこれに従うことを呼びかけたビラが巻かれた。そこでは、シーラージー師の教令は、12代イマームの命令に匹敵するものであり、また、モカッレドのみならずモジュタヘドにもこの教令に従う義務⁽²⁹⁾があると説かれた。

12月25日には、何者かによってテヘラン市内のあちこちに「シーラージ

一様の教令により、来る月曜日はジハード（聖戦）の日である。準備されたし。」と書かれたビラが貼り出されると、この噂は国王への反感を募らせていたひとつのあいだに瞬く間に広がり、市内はジハードの準備をするひとつとで大混乱となった。⁽³⁰⁾

異常事態を恐れた政府は、ジハード宣言を否定するようウラマーに要請するとともに、12月27日、タバコ利権廃止宣言を市民にたいして明確なかたちでおこなった。⁽³¹⁾しかし、実際にはこのときまだ国外利権は残されたままであり、タバコ利権の完全廃止を求めるウラマーと国王との対立は未だ解消したわけではなかった。

III. タバコ利権の廃止と運動の終息

1892年1月1日、タバコ利権が廃止されたというテヘランからの知らせにたいする回答電報がサーマッラー在住のシーラーギー師から届いた。その内容は次のようなものであった。

「首都の主だったマウラー方へ

タバコの専売解除の朗報に接し、国王陛下への感謝と期待と祈りがいやがうえにも増しました。

陛下の大いなる御恵みによって外国人の勢力が一挙にイランからなくなりますように。」⁽³²⁾

このシーラーギー師からの電報には、国王に感謝する旨が記されていたものの、国王・政府が待望していた教令解除については一切言及されていなかった。これはもちろんシーラーギー師がテヘランからの電報の内容に疑惑の念を抱いていたためである。⁽³³⁾

シーラーギー師からの電報に教令解除の望みを託していた国王と政府は大いに失望した。追い詰められた国王は、アーシュティヤーニー師に密かに親書を送り、タバコ教令の解除をおこなうよう迫った。⁽³⁴⁾この国王の親書がアーシュティヤーニー師のもとに届くとほぼ同時に、1月4日の晩には、国王はアーシュティヤーニー師のもとに使者を遣わして同師に喫煙を強要し、さもなくばテヘランを去るように脅迫した。アーシュティヤーニー師は「教令に反することはできない。イスラム教徒を仲間割れさせるようなことはしない」と言って喫煙を拒否し、テヘランを立つ用意をはじめたところ、これを知ったイラン民衆が

騒ぎはじめ、市内は大混乱となった。⁽³⁵⁾

この騒動のなかで、王宮近くに接近した群衆にたいして政府による発砲事件が起こり、これによって6人が死亡した。この事件に衝撃を受けた国王は、この事件をめぐるアーシュティヤーニー師と交渉を行った。この席で、アーシュティヤーニー師は政府側に、発砲事件にたいする損害賠償とタバコ利権も含めた過去に外国に譲渡された全利権の廃止を強力に要求した。これにたいし、政府は、損害賠償についてはそれに全面的に応じるが、全利権の廃止は不可能であるとし、その代償としてアーシュティヤーニー師がこの要求を取り下げることと引き換えに、タバコに関する国内、国外を含む利権の完全廃止をおこなうことに同意した。⁽³⁶⁾ こうして、シーラージー師のタバコ教令に従ったイラン民衆の「タバコ・ボイコット」による全国的な抵抗運動は、ついに国王の譲歩を勝ち取った。

しかし、タバコ利権の完全廃止が決定された後も、テヘランではシーラージー師のタバコ教令に従って依然として「タバコ・ボイコット」が続けられた。運動の盛り返しを恐れる政府は、何とかこの教令を解除させようと、テヘランのウラマーに脅迫的圧力をかけ始めた。そしてテヘランのウラマーも、本意ながらこれに同調的な態度を示すようになった。⁽³⁷⁾ こうしたことは、上記の交渉の後、タバコ教令の解除を求める国王の書簡にたいするアーシュティヤーニー師の以下の返書からも明らかである。

「(前略)さて、先の御親書中の、私をはじめ全てのウラマー、一般大衆が陛下の慈愛に感謝するように、また私が講義の場などでそれについて論じるようにとの御言葉につきましては、御前会議において、私が不幸の除去と腐敗の禁止について感謝の意を表明した最初の人間であったのみならず、陛下の御言葉に従うのにやぶさかでなく。講義などの場で陛下の慈愛と改革、とりわけ公社の廃止とタバコ問題の改革における政府高官達の厚情および非常な苦勞、困難について話しましたので、私の陛下の命に服する様は、あらゆる人の目に焼きつくでしょう。

(中略)次に、水煙管の問題は、仰せの通りこれに干渉すべきではありません。しかしながら、ホッジャット・ル・エスラームであるシーラージー様による解禁令を見ない限り、ひとびとは禁を破ろうとしないでありましょう。

もし陛下がお望みなら、私は陛下の御命令に服従するために、シーラージー

様に宛てて内密に書簡を書きましょう。至高至聖なる者の命令には従がわなくてはならない。」⁽³⁸⁾

アーシュティヤーニー師はおそらく政府の圧力に屈するかたちで、シーラーギー師に教令解除を要求する次のような電報を送った。

「タバコ利権は、陛下の御尽力と御配慮により、全国民を安心させるため、そしてあなた様のものとされるタバコの使用を禁ずる教令を尊重するために、宰相アミーノッ・ソルタン閣下をつうじてイラン内外から完全に解除されました。(中略)

明瞭に水煙管などの使用を許可され、陛下の御厚情にたいして祈りを捧げる意をお伝え下さい。また、国民と政府のための宰相閣下の御尽力も考慮いただきたく存じます。」⁽³⁹⁾

アーシュティヤーニー師とともにテヘランでの運動を指導してきた他の有力ウラマーもぞくぞくとシーラーギー師に喫煙許可を願い出る電報を打ちはじめた。⁽⁴⁰⁾しかし、シーラーギー師はテヘランからの情報を全く信用できないものとみなし、教令の解除を許可しようとしなかった。また、このころ、タブリーズ、エスファハーン、シーラーズなどからも、教令解除について問い合わせる電報が⁽⁴¹⁾つぎつぎにシーラーギー師に送られてきたが、同師は、決して態度を変えず、それらの諸都市のウラマーに「タバコ・ボイコット」の継続を要請した次のような電報を送った。

「タバコ使用禁止に関する私の教令にたいして質問がなされました。そのとおり、私は教令を発出しました。現在、喫煙は禁じられております。外国人の利権が国内外から完全に取り払われたことが私にとって信頼できる方法で証明され、私が教令解除を諸兄に通知しないかぎり禁煙は依然として有効です。」⁽⁴²⁾

教令は未だ有効と明記されたシーラーギー師の電報は、宰相アミーノッ・ソルタンの命令により、テヘランはじめ各地の電報局で留めおかれ、運動が鎮静化するまでイラン国内のウラマーおよび民衆の目から隠された。⁽⁴³⁾その一方で、アミーノッ・ソルタンはアーシュティヤーニー師に圧力をかけ、教令解除を強要した。そして、1892年1月26日、シーラーギー師からの許可が得られないまま、テヘランにおいてタバコ教令の解除が宣言されたのであった。⁽⁴⁴⁾

イラン国内におけるタバコ・ボイコット運動は、このテヘランでの教令解除宣言によって一応終息したといえる。シーラーギー師はイラン政府によるタバ

コ利権の廃止を信用せず、教令解除に踏みきらなかったが、もはやその拘束力とマルジャ・エ・タクリードとしての同師の權威は失われたものとなった。シーラー・ギー師とアーシュティヤーニー師は、教令解除の問題をめぐる⁽⁴⁵⁾その後も数回にわたって電報による交渉をおこない、それにかんして両者のあいだで決着をみたのは少なくとも1892年2月初旬以降のことであった。

む す び

1891年春に始ったタバコ・ボイコット運動には、十二イマーム派シーア派のウラマーが多数参加し、諸都市において政府にたいする民衆の抗議運動を指導した。こうしたイラン国内の運動にたいしてイラク領内シーア派聖地都市サーマラー在住のシーラー・ギー師も、これを支持する姿勢を表明し、国外からの運動への参加を果たしたが、同師は当時十二イマーム派シーア派にあって、法判断にかんする最高權威者を意味するマルジャ・エ・タクリードという宗教上の地位にあり、十二イマーム派シーア派全ウラマー、全信徒からなる宗教制度（マルジャ・エ・タクリード制度）の頂点に立つ人物であった。

イラン国内での運動の高まりを受けて、シーラー・ギー師は、「こんにちタバコの使用は十二代イマームさまにたいする戦いである」という十二イマーム派シーア派に象徴的な言葉で表現された喫煙を禁じる内容の教令を発令したが、これは、喫煙の是非にたいするマルジャ・エ・タクリードとしてのシーラー・ギー師の法判断であった。ケルマナーニーによれば、テヘランの有力ウラマー、アーシュティヤーニー師がこの教令を起草し、それをシーラー・ギー師のものとして出したということであったが、これは、教令をシーラー・ギー師に結びつけその權威を高めるための措置であったと理解できよう。

このように、十二イマーム派シーア派における最高の法判断として発令されたタバコ教令は多くのウラマーに支持されたが、なかには、ペフバハーニー師のようにシーラー・ギー師の教令に法理論上の問題があることを理由にこれを支持しないウラマーもあり、必ずしもすべてのウラマーが同一歩調をとっていたわけではない。しかし一方で、オスーリー派であるシーラー・ギー師とは異なる宗派、たとえばシャイヒー派のウラマーのなかに教令を積極的に支持する姿勢もみられた。こうして禁煙による抗議行動がイラン全土で繰り広げられた結果、1892年1月初頭、運動のさらなる拡大を恐れた政府の譲歩により、ついにタバ

コ利権は廃止された。

以上が本稿の考察のまとめであるが、主要一次資料であるペルシャ語文献は、前述したように、タバコ・ボイコット運動の全過程を網羅しうるものではないため、本稿の考察もきわめて限られた範囲内のものとなった点は否めない。また、資料内容の検討やマルジャ・エ・タクリード制度についての考察が不十分なことなど、不備な点も多々ある。これらについては今後の課題としたい。

注

- (1) たとえば、イラン立憲革命（1905—11年）、石油国有化運動（1952—53年）、イラン・イスラム革命（1978—79年）が挙げられる。
- (2) 欧米での研究には、E. G. Browne, *The Persian Revolution of 1905—1909*, London, 1966 (2nd ed.), L. V. Stroeveva, “Borba iranskoga narodav protiv anglijskoj tabachonij monopolijv Irane v 1891—1892 gg,” *Problemy istorii natsionalnoosvoboditelnogo dvizheniya v stranakh Azii*, Leningrad, 1963. A. K. S. Lambton, “The Tobacco Regie: Prelude to Revolution,” *Studia Islamica*, XXII (1965), pp. 119—157; XXIII (1965), pp. 71—90, また、イランにおける研究としては、E. Teymūri, *Taḥrim-e Tanbākū: Avvalin Mogāvemāt-e Manfi dar Īran*, Tehrān, 1949—50, M. R. Zanjāni, *Taḥrim-e Tanbākū*, Tehrān, n. d., F. Ādamiyat, *Shouresh bar Emtiyāznāme-ye Regie: Taḥlil-e Siyasi*, Tehrān 1981—82, がある。日本の研究としては、加賀谷寛「西アジアにおけるナショナリズム—アフガーニーの『パン・イスラミズム』を中心に——」『思想』438号, 1960年, 1610—1622頁, 同, 「19世紀イランの民族運動」『岩波講座世界歴史 21』岩波書店, 1971年, 365—85頁, 同『イラン現代史』近藤出版社, 1975年, 18—31頁, 鈴木均「イスタンブール在住イラン人とタバコ・ボイコット運動——ペルシャ語紙『アフタル』の分析を通じて——」『アジア・アフリカ言語文化研究』32, 1986年, 143—178頁, がある。
- (3) N. R. Keddie, *Religion and Rebellion in Iran: The Tobacco Protest of 1891—1892*, London, 1966.
- (4) Nāẓem al-Eslām Kermānī, *Tārikh-e Bidāri-ye Īrāniān*, Ōqāh Enteshārāt, Tehrān, 1983—84 (1st printed in Tehrān, 1910.). 本書は、「序文」と5巻からなる著書である。1巻から5巻までは著者の立憲革命への参加記録である。タバコ・ボイコット運動にかんする記録は、「序文」に含まれている。著者ナーゼモル・エスラム・ケルマーニーは本名をミールザー・モハンマドといい、1864年ケルマーン市に生れた。故郷においてウラマーとしての教育を受けたケルマーニーは1891年8月、修業のためテヘランに赴き、以来首都で20年間を過した。この間にタバコ・ボイコット運動とイラン立憲革命に参加した。テヘランでは、おもにアーシュティヤーニー師の

- 集会に参加していた。1911年頃故郷ケルマーンに帰り、1918年か19年に病没した。
Kermānī, *op. cit.*, p. 9.
- (5) 『イラン人覚醒の歴史』の「序文」には、19世紀のイラン史にかんする重要な資料が数多く含まれている。とくに、アフガーニーとイランとの関わりにかんする貴重な資料も収録されており、Browne, 加賀谷, Keddie らはいずれもこうした資料に注目している。
- (6) *Correspondence Respecting The Persian Tobacco Concession*, London, 1892. なお、1860年代に「インド・ヨーロッパ電信利権」がイランよりイギリスに譲渡され電信線の敷設がおこなわれた結果、イラン国内、イランとイラク、イギリスとイランなどの間での電信が可能となった。
- (7) *Correspondence*, Wolff to Salisbury, no. 2, April 3, 1890. 契約内容はケルマニーによっても記されている。Kermani, *op. cit.*, p. 53. 日本語訳は、加賀谷『イラン現代史』, 190—93頁に掲載されている。
- (8) この時期、イランのさまざまな利権をめぐり、ヨーロッパ人によって激しい利権獲得合戦が広がられていた。たとえば1872年にはイギリスのロイターにイランの資源産業にかんする包括的利権が譲渡されたが、ロシアの反対により、結局は廃止された。Keddie, *op. cit.*, p. 6.
- (9) イランにおける1889年のタバコの輸出額は、ケシ、生糸、麦、果実、綿価に次いで多い。加納弘勝「19世紀後半から20世紀初頭のイラン経済——伝統的産業から見たイラン経済」, 『アジア経済』X V, 1974年, 71頁。イランのタバコ産業については、C. Issawi (ed.), *The Economic History of Iran 1800–1914*, Chicago, 1971, pp. 130–136, pp. 247–51. にも若干の説明がある。また、坂本勉「トルコ＝イラン比較関係史と都市の商業」『イスラムの都市性研究報告』42, 比較の手法によるイスラムの都市性の総合研究, 1989ではイランとトルコとのタバコ交易について述べられている。
- (10) イラン人にはじめてタバコ利権の存在を知らせたのは、イスタンブール在住のイラン人達が発行していた『アフタル』紙であったといわれている。こうした点についての研究が、鈴木、前掲論文でおこなわれている。19世紀のイスタンブール在住イラン人についての研究に、坂本「十九世紀イスタンブールとイラン人」, 『内陸アジア・西アジアの社会と文化』山川出版社, 1983年, 823—45頁がある。また、アフガーニーの果たした役割については、Browne, *op. cit.*, 加賀谷, 前掲書, Keddie, *op. cit.*, に詳しく述べられている。
- (11) Keddie, *op. cit.*, p. 67.
- (12) *Correspondence*, Kennedy to Salisbury, no. 18, Sept. 9, 1891, *Ibid.*, Kennedy to Salisbury, no. 39, Oct. 10, 1891.
- (13) 基礎法學理論に学問の基盤をおき、論理的推論による法の演繹、すなわちイジュティハードを認めるオスリー派にたいし、アフバリー派は宗教法規の適用は伝承に

- のみその根拠を求め、イジュティハードを否定した。イブン・ザイヌッディーン、(村田幸子訳)『イスラーム法理論序説』、岩波出版、1985年、520頁。
- (14) Lambton “A Reconsideration of the Position of Marja Al-Taqlid and Religious Institution,” *Studia Islamica*, XX (1964), pp. 115–35, U. R. Cole, “Imami Jurisprudence and the Role of ‘Ulamā’: Mortazā Ansārī on Emulating the Supreme Exemplar,” Keddīe (ed.), *Religion and Politics in Iran*, pp. 33–46.
- (15) Cole, *op. cit.*, p. 41, p. 46.
- (16) アフガーニーはシーラージー師にタバコ・ボイコット運動への参加を呼びかける書簡を送った。この書簡は、シーラージー師の参加に影響を与えたと言われている。こうした点は、加賀谷、「西アジアにおけるナショナリズム」、1610—17頁および、Keddīe, *op. cit.*, pp. 69–73, に詳しく論じられている。この書簡の原文は、Kermānī, *op. cit.*, pp. 88–92 に掲載されている。
- (17) Kermānī, *op. cit.*, pp. 33–34. シーラージー師はタバコ・ボイコット運動末期にも再び国王にこうした書簡を送っている。 *Ibid.*, pp. 34–35.
- (18) *Correspondence*, Kennedy to Salisubary, no. 30, Oct. 7, 1891.
- (19) *Ibid.*, Lascelles to Salisbury, Nov. 23, 1891.
- (20) Kermānī, *op. cit.*, p. 30.
- (21) *Ibid.*, pp. 30.
- (22) *Ibid.*, pp. 19–20.
- (23) シーア派の一派であるが、スンニー派の論理学を援用していた。19世紀にオスリー派と対抗関係にあった。A. Amanat, *Resurrection and renewal*, New York, 1989, pp. 33–69. 19世紀イラン社会では激しい宗派对立があったと指摘されている。加賀谷、「19世紀イランの民族運動」、371—373頁。
- (24) Kermānī, *op. cit.*, pp. 21–22.
- (25) *Correspondence*, Lascelles to Salisbury, no. 40, Dec. 12, 1891.
- (26) *Ibid.*, same to same, no. 47, Dec. 19, 1891. Kermānī, *op. cit.*, 35–36. 同日、イラン諸州知事にもタバコ利権を廃止するとの通達が政府より電報で送られた。 *Ibid.*, p. 39.
- (27) *Ibid.*, p. 22.
- (28) *Ibid.*, p. 22.
- (29) *Ibid.*, pp. 47–48.
- (30) *Ibid.*, pp. 48.
- (31) *Correspondence*, Lascelles to Salisbury, no. 49, Dec. 27, 1891.
- (32) Kermānī, *op. cit.*, p. 36.
- (33) *Ibid.*, p. 44.
- (34) *Ibid.*, pp. 22–24.

- (35) *Ibid.*, p. 21, pp. 19–20.
- (36) *Correspondence*, Lascelles to Salisbury, no. 52, Jan. 4, 1892, same to same, no. 53, Jan. 5, 1892.
- (37) この点に関して、Keddie は政府によるウラマーの買収もおこなわれていたと述べている。また、加賀谷は、革命への転化を恐れた一部の商人達とウラマーとの妥協もあったと述べている。Keddie, *op. cit.*, pp. 115–18. 加賀谷『イラン現代史』近藤出版社、1975年、30頁。さらに、テヘランのイマーム・ジョメが、ウラマー分断工作をしていたという報告が、当時のフランス駐テヘラン公使によって本国になされている。Keddie, *op. cit.*, pp. 116–17. しかし、こうした点はケルマーニーの資料からは明確には確認できなかった。
- (38) Kermānī, *op. cit.*, p. 28.
- (39) *Ibid.*, p. 40.
- (40) *Ibid.*, pp. 40–41.
- (41) *Ibid.*, p. 44.
- (42) *Ibid.*, pp. 45–46.
- (43) *Ibid.*, p. 44–45. ケルマーニーがこのことを記しているほか、ラッセルも同様の報告を本国におこなっている。*Correspondence*, Lascelles to Salisbury, no. 61, Jan. 25, 1892.
- (44) *Ibid.*, same to same, no. 62, Jan. 26, 1892.
- (45) シーラージー師がアーシュティヤーニー師に強く要請されて国王にタバコ利権の廃止を感謝する電報を送り、これにたいして国王も丁重な返答を送った。これに先だって、シーラージー師は教令解除をアーシュティヤーニー師に伝えている。これらの電報文は、Kermānī, *op. cit.*, pp. 37–38. に集録されている。